

家庭と女性の生き方に関する意識研究（その2）

— 青年期の若者の意識調査から —

昭和女大短大

瀬沼 頼子

【目的】現在青年期にある若者が、家庭や女性の生き方に関してどのような意識を持っているかは、次代の家庭や家族形成の上に影響を及ぼすものと考えられる。本研究では、ライフスタイルや生活の価値観が多様化する一方で、まだ古い慣習が残る農村地域を対象に、若者の家庭や女性に関する意識を明らかにする。

【方法】新潟県Y町に住む年齢15歳～18歳の男女248名を対象として、1993年8月にアンケート調査を実施した。

【結果】有効回答数211（回収率85.1%）を得た。うち男子101、女子109人であった。対象者は96.7%が高校生で、残りは専門学校生と就職者である。対象者の世帯の特徴は、兼業農家が6割ともっとも高く、次いで給与世帯が2割である。母親の8割以上が何らかの収入労働に従事しており、勤務形態は6割が常勤である。子どもの数は3人がもっとも多く54%である。

家庭・家族のよさについては、「明るい家庭である」が全体の6割を占め、次いで「毎日の家族団らんの時間が十分ある」が約3割となっている。家庭の中心は、「どちらかと言えば子ども中心」と「一概に言えない」が共に22.7%を占めている。結婚して家庭を築くことについては、「家庭は精神的やすらぎの場」との考えが7割を占め、次いで「子どもを生き育てることは生きがい」が6割余りを占めている。女性が収入労働することについては、「結婚や出産などでは一時家庭に入る方がよい」が54.5%を占め、「働き続ける方がよい」は14.7%である。